九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

西シベリアの民族およびウラル越え交通路

三上，正利

https://doi.org/10.15017/2334013

出版情報：史淵. 72, pp.53-76, 1957-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

西シベリアの民族およびウラル越え交通路

三上正利

目次

一、緒言
二、西シベリアの諸民族
三、ウラル越え交通路の変遷
四、結言

一、緒言

ロシア人が欧露の森林帯からその南方の森林ステップ帯およびステップ帯へと進出していつた事情について、また、一般にロシア人のシベリア征服にみられる特徴的な諸事実について、筆者はさきに簡単ながら序説的な記述を試みたことがある。[註1] 本稿はそれに続くもので、筆者の企図している「西シベリア開拓の歴史地理学的研究」の一部分を構成するものである。[註2] ここではまず、ロシア人のシベリア征服時代において、西シベリアの各地方には如何なる民族が占拠していたのであるか、またその時代には、ウラル山脈を越えて欧露とシベリアとを連絡する交通路はどのように変遷していつたかということを、ソ連における歴史学的ならびに歴史地理学的研究の成果を参照しつつ考察してみる。

註1　拙稿、シベリアの開拓と人口（人文地理、四巻二号、昭和二七年）
同、欧露の森林ステップ帯およびステップ帯の開拓（史淵、五七輯、昭和二八年）

2　西シベリア開拓の歴史地理学的研究の概要については、本稿と前後して朝倉書店から刊行される予定の「歴史地理講座、第二巻」の拙稿「シベリア開拓の歴史地理」を参照されたい。

二、西シベリアの諸民族

まず最初に、ロシア人がウラル山脈をこえて西シベリアへ進出していつた当時、それらのロシア人と関係をもつにいたつた西シベリアの諸民族について、概要のことをのべておきたい。

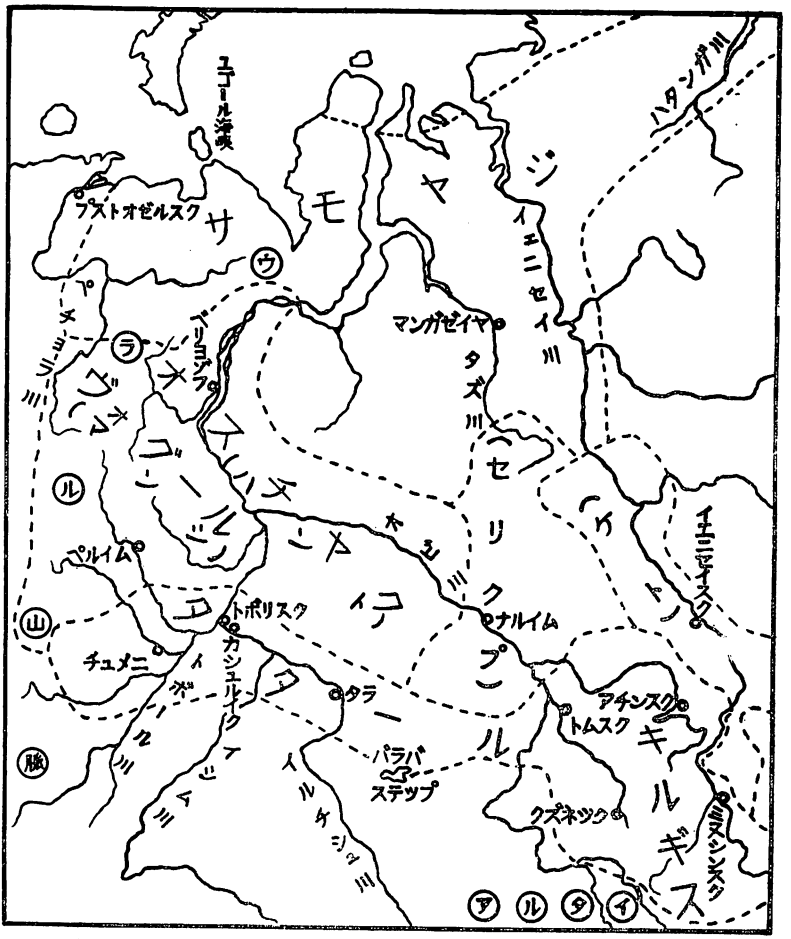
ロシア人の進出以前における古代シベリアの住民が如何なるものであつたかということは、一八世紀にシベリア史研究の基礎を築いたミユレル（G・F・Müller）いらいの困難な問題で、近年におけるシベリア諸地方の学術的調査の結果として明かになつた事実も多いようではあるが、本稿とは直接の関係もなく充分の用意もないので、ここではただ、西シベリアは旧石器時代いらい人類の居住地となつていたことを指摘するにとどめる。新石器時代から青銅器および鉄器時代にわたる、西シベリア南部から北部カザフスタンおよびアルタイ・サヤン山地にかけての古文化は、近年とくに注目されているもので、トボール川およびイルチシュ川の上流地方、およびオビ川上流のアルタイ山地からイェニセイ川上流のミヌシンスク盆地にわたるアルタイ・サヤン地方などには、アファナシエヴォ文化（Afanasyevskaya）とか、アンドロノヴォ文化（Andronovskaya）とか呼ばれる古い文化圏の遺跡をはじめとして、歴史時代にいたるまでの多数の遺跡がしられているのである。[註1]

ユグラ族（ウグラ族）。さて、ロシア人のシベリア進出に直接関係する民族として、まず問題となるのはユグラ族（Yugra, Yegra, Ugra）であろう。一一世紀末にノヴゴロド人が欧露の北部から毛皮をもとめて北部ウラル方面へ進出したとき、

まず出会つたのはペチョラ族であり、ついでユグラ族であつた。ペチョラ族というのは、ウラル山脈西方のペチョラ川流域にいたズィリヤン族（Zyryan, 現在の名称はコーミ族 Komi）とおもわれる（第一図参照）。ネストル年代記の一〇九六年の項にみえるギュリヤタ・ロゴヴィチ（Gyuryata Rogovich）の談話によつて判断すれば、かれがペチョラ族のところへ派遣した者が、そこからさらにユグラ族のところへゆき、ユグラ族から、おそらくウラル山脈と推定される「天空にそびえる」山脈のこと、「その山脈を越える道は、断崖と雪と密林で通ることができない」ことなどをきいたのであるから、一一世紀におけるユグラ族の居住地は明らかにウラル山脈の西斜面であつたと考えられる。したがつてバフルーシンも、この北部ウラル越えの難路がロシア人に征服されたのは、おそらく一二世紀初めごろであろうと推定している。[註2]

しかるに一四世紀の記録、すなはち第四ノヴゴロド年代記の一三六四年の項に「この年の冬、ノヴゴロド人等はオビ川にそうて海にいたるまで遠征したのち、ユグラ族のところから帰還した」という記事があり、一四世紀には明らかにユグラ族の居住地はウラル山脈の東斜面であつたことがわかる。さらにシチェグロフ（I. V. Shcheglov）はその著「シベリヤ年代史」の一五一四年の条に、この時代から単にユグリヤというときは、スイシワ川（Sysva）とソシワ川（Sosva）の流域およびベリョゾフ（Berezov）附近を意味するようになつたと記しており、バフルーシンもまた、一六世紀のロシア人の地理知識を記載しているものとみなされている「大地図の説明書 Kniga Bolshomu Chertezhu, 1627」の記述もそれに合致するとのべている。要するに、はじめ北部ウラル山脈の西斜面にいたとおもわれるユグラという民族の名が、のちにはウラルの東斜面のオビ川下流地方一帯の地名としてもちいられるようになり、さらにその範囲が限定されて、ウラル山脈からオビ川に流入するソシワ川およびスイグワ川（Sygva）流域の地名となつたもののようである（第二図参照）。そうしてユグラという名は一六世紀のはじめごろからすたれ、一七世紀のはじめを最後としてロシアの文献からは全く消失してしまうのである。[註3]

ユグラ族を如何なる民族に比定すべきであるかについて、ロシアの学者の見解は、かならずしも一致していない。ベル



第一図　17世紀末の西シベリアの民族分布
（点線は言語による民族の境界。Bakhrushin, S.V.：Nauchnye trudy, Ⅲ, chast 2. 参照）

クによれば、語の由来からいうとユグラというのはズィリヤン族（コーミ族）の言語で、オスチャク族または北部ヴォグル族をさしてよぶ名称であり、したがつて、ユグラ族をヴォグル族（Vogul, 現在のマンシ族 Mansi）とみなしたり、オスチャク族（Ostyak, 現在のハントゥイ族 Khanty）とみなしたりするのが一般的な見解であるといつており、かれ自身はドゥミトリエフ（A. Dmitriev）の見解をひいて、独自の民族であつたユグラ族が、一八世紀初めごろには、その近親関係にあるヴォグル族および一部はオスチャク族と混血してしまつたものと考えている。バフルーシンは、「古くユグラとよばれた民族にたいして、一六世紀以降にタタール的なウシュチャク（Ushtyak）またはオスチャク（Ostyak）という名称があたえられた」としている。すなはち、ユグラ族とは後世のオスチャク族（ハントゥイ族）であると考えているが、なおロシア人によつてユグラ族とよばれたもののなかには、確かに若干のマンシ族（リヤピン Lyapin のヴォグル族）がいたことをも同時に指摘している。[註4]

ヴォグル族は一四世紀の文献にヴォグリッチ（vogulichi, gogulichi, bogulichi）などの名称のもとに現れる。これもウラル西方の北ドヴィナ川の支流ウイチェグダ川流域（ペルミ地方 Perm）にいた民族を指したもののようであるが、一五世紀および一六世紀初頭には、すでにウラル東方のペルイム川（Pelym）流域のマンシ族を指している。このヴォグル族という名称は後代まで残つて、ウラル東方のオビ川の支流トゥラ川、タウダ川およびコンダ川の流域、ならびにウラル西方のカマ川流域にいた民族がこの名でよばれた。

西シベリアのオビ川流域にいたオスチャク族（ハントゥイ族）とヴォグル族（マンシ族）との主として居住する地方は森林帯であつて、かれらのおもな生業は漁業で、それに狩猟がともない、農耕はその地方の自然的条件がゆるさないので一般には行われていなかつた。[註5] この両民族は、ともにフィン系（Finno-Ugrians）に分類される近親関係の民族で、一七世紀ごろのロシア人も、前述のように両民族を混同している場合もある。

なお、それと関連して注意しておきたいことは、一七世紀のロシア人が、本来のオスチャク族（ハントゥイ族）とは言語なども異なる東部の諸民族をも、その生活様式や風俗の類似からオスチャクの名のもとによんでいたことである。すなはち、かれらはオビ川の中流とイェニセイ川とのあいだの森林帯で漁業および狩猟に従事していたオスチャク・サモイェード族（Ostyak-Samoyed, 現在のセリクプ族 Serkupy）をもオスチャク族とよんでいた。これはその言語からみても実際にはサモイェード族にはいるもので、現在その大部分がナルイム方面にすんでいる関係から、ヨヘルソンはこれをナルイム・サモイェード族（Narym Samoyed）とよぶことを提唱している。またイェニセイ川の中流およびその支流の森林帯で主として狩猟および魚業によつて生活していた、いわゆるイェニセイ・オスチャク族（Yenisei Ostyak, 現在のケト族 Kety）をも、同様にロシア人はオスチャクの名でよんでいた。しかし、これは中央アジアから流入したイラン系統の血液を混じているのではないかなどといわれる疑問の民族で、その言語も周囲のウラル・アルタイ語系とは相違がいちじるしく、すでにクラプロート（H. J. Klaproth）もこの民族のオスチャクという名称は廃すべきであると主張しているということであり、ヨヘルソンはこれを単にイェニセイ族（Yeniseians）とよぶことを提唱している。[註6]

サモイェード族。森林帯を占拠していた前述のユグラ族の北には、その隣人としてツンドラ帯にサモイェード族がいた。ロシアの文献にはサモイェードゥイ（Samoyedy）とかサモヤジ（Samoyad）とか記され、今日のネネツ族（Nenets, ユラク族 Yurak）、エネツ族（Enets, イェニセイ・サモイェード族 Yenisei Samoyed）およびヌガナサン族（Nganasan, タウギ族 Tavgi）を指すものであつた。かれらは遊牧民で養鹿をおもな生業とし、狩猟と漁業をもおこなつていた。その活躍舞台は、欧露北部のカニン半島からシベリア北部のハタンガ川にいたるあいだに展開する広大なツンドラ帯であつた。一七世紀において、オビ川下流のベリョゾフのサモイェード族は毎年、東北方のタズ川畔のマンガゼイヤ郡（Mangazeiskiy uezd）へいつて毛皮を入手し、それを売るためにウラル山脈をこえてペチョラ川下流のプスト

オゼルスク（Pustozersk）へいつたが、時にはそこからさらに西進して、メゼニ川およびカニン半島方面にまでも達したという。[註7]

タタール族。最後に西シベリア南部の民族である。ここには森林帯の南部から森林ステップ帯にかけて、タタール族（Tatar）とよばれるチュルク系の諸民族がいた。タタール族は一三世紀に西シベリアの南部を征服し、ここにシベリア王国を建設した。一六世紀半ばすぎに、南部シベリアとの交通路を支配していたカザン汗国がロシアに征服された後、一五五五年にシベリア汗エジガル（Edigar, Yadigar）は、その王位の競争者であつたブハラのシェイバン王朝（Sheiban）から圧迫されたので、モスクワの臣下となつて毛皮貢納を支払う義務を約束するにいたつた。しかし、それは充分な服属関係ではなく、やがてエジガル自身も一五六〇年代にシェイバン王朝のクチュウム汗（Kuchum）によつて駆逐されてしまつた。[註8]一五八〇年代にイェルマク（Yermak）のひきいるロシアのコサックたちに攻撃されたのは、このクチュウム汗の王朝である。シベリア王国の首都は、一五世紀においてはチンギ・トゥラ（Chingi-Tura, 現在のチュメニTyumen）であり、一六世紀においては、今日のトボリスク附近にあつたカシュルイク（Kashryk）すなはち普通にはイスケル（Isker）とよばれているところであつた。[註9]

シベリア汗国のタタール族の領土は、西方はトボール川およびその支流トゥラ川の流域から、東方はイルチシュ川およびオムスク附近でそれに合流するオミ川の流域にわたつており、その権力は西方ではトゥラ川流域のマンシ族（ヴォグル族）、北方ではオビ川沿岸のハントゥイ族（オスチャク族）にまでおよんでいた。

タタール族は元来は遊牧民で、牧畜をおもな生業としていた民族であつたが、西シベリアを占拠するにいたつてその生活様式はいちじるしく変化した。バフルーシンによれば、シベリア王国南部のバラバ・ステップ（Barabinskaya step）のタタール族は一八世紀においてなお遊牧的牧畜を主業としている有様であつたが、比較的北方の森林地方では牧畜の重

要性がうしなわれ、家畜の数も大きくなく、一六世紀においてはノガイ・ステップ（Nogaiskaya step）から、馬や家畜がシベリアへ供給されていたという。森林ステップ帯を占拠したタタール族の経済においては、狩猟と漁業とが主要な地位をしめていた。そうして首都の廃墟から鎌や犁頭が発見されたことによつても、また文献によつても、シベリアのタタール族が農耕をおこなつていたことは明らかであるが、それは原始的な半遊牧的な農耕で、成熟がはやくて長期の耕作を必要としない大麦とか、ポールバ（polba 小麦の一種）とか、燕麦とかが播種されたようである。[註10]

なお、タタールとよばれるチュルク系の民族は、オビ川の上流およびその支流トミ川ならびにチゥルイム川などの流域から、アルタイ山地にかけての地方にも住んでいた。すなはちトムスク、バルナウル、ビイスク、クズネツク、アチンスクなどの方面にいたもので、南部の山地ステップでは遊牧するものもあつたが、北部の山地森林帯では定着して狩猟や採集に従事していた。そのうち、トムスク・クズネツク・タタール族（Tomsko-Kuznetsk Tatars）は鉄工技術にすぐれていたので、ロシア人はこれをクズニェーツイ（Kuznetsy 鍛冶屋）とよんだということは、[註11] 古代アルタイの住民が鉄そのたの金属細工に秀でていた事実とか、今日この地方がクズネツク炭田と製鉄業とを基礎として、ソ連有数の大工業地となつている事実などと思いあわせて興味がある。

キルギス族。アルタイ東方のイェニセイ川上流方面からサヤン山脈にかけての地方にも、チュルク系の民族がすんでいた。この方面でロシア人が出会つたのは、いわゆるイェニセイ・キルギス族（Yenisei-Kirgiz）である。この方面には古代にキルギズとよばれた民族がいたことは周知のとおりであるが、[註12] 一七世紀ごろのロシア人がキルギス族の名のもとに一括して考えていた民族は、イェニセイ川上流左岸のアバカン川（Abakan）流域のステップ帯（キルギス・ステップ Kirgizskie stepi）[註13] を中心に、北方はオビ川の支流チゥルイム川の流域におよぶ地方にすんでいた。

かれらは遊牧生活をいとなみ、家畜飼養を主業とし、狩猟と漁業とを副業としていた。この地方の古代の住民は明らか

に農耕をもおこなつていたことは、中国の文献によつてもまた鎌が出土したことによつても証明されているのであるが、バフルーシンによれば、一七世紀にロシア人が接触した時代のキルギス族は、農耕をおこなつておらず、穀物は掠奪によつて手にいれていたように報道されている。[註14] しかし註13でものべたように、かれらは一八世紀初頭（一七〇三年）にジュンガル族によつて中央アジアのセミレチエ（Semirechye）方面へ移動させられてしまつた。

以上において、ロシア人が西シベリアを征服した一六――一七世紀を中心とする時代の西シベリアの諸民族について、概略のことをのべた。ここではその社会組織などには言及しなかつたが、これらの原住民族はロシア人に征服せられてのち、ロシア政府にたいしヤサーク（yasak）という毛皮貢税を納入させられるようになり、[註15] 同時に毛皮を中心とする商品経済のなかに急速にまきこまれると、かれらは社会的にも経済的にもしだいに変化をおこすにいたる。そうしてロシアの帝政末期にいたるまでの間に、一方では身体的にも文化的にも大なり小なりロシア化の傾向をたどり、また一方では、人口が増大し繁栄したものもあつた反面には人口減少のために衰滅への道をたどつた民族もあつたのである。[註16]

註1 Kiselev, S.V.: Drevnyaya istoriya yuzhnoy Sibiri. Moskva, 1951.
梅原末治、古代北方系文物の研究、昭和一三年。
江上波夫、西シベリア発見の一前漢鏡（ユウラシア古代北方文化、昭和二五年、所収）
角田文衛、古代北方文化の研究、昭和二九年。

2 Berg, L.S.: Die frühesten Nachrichten über den äussersten Norden von Sibirien. (Ibid.: Geschichte der russischen geographischen Entdeckungen. Leipzig, 1954) S.52.
Bakhrushin, S.V.: Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVI i XVII vv. (Ibid.: Nauchnye trudy. Ⅲ. Moskva, 1955) str. 137, 74. この論文は一九二七年に単行本として刊行されたもので、わが国では本文を若干省略し訳者補註をくわえて、昭和一八年に外務省から邦訳書「スラヴ民族の東漸」としてだされた。最近ソ連科学アカデミーからバフルーシン論文集（三巻四冊）が刊行され、その第三巻（二冊）がこの論文をはじめとするシベリア史関係の論文集となつている。本稿は以下この論文集に負うところが多い。
シチェグロフ原著、吉村柳里訳、シベリヤ年代史、昭和一八年、八―一〇頁。　これの原著は一八八三年イルクーツク刊行である。バフルーシンは前記の論文の第一章をシベリ

ア史関係の文献批判にあてているが、シチェグロフのこの年代史を良心的な著作と評している。

3 シチェグロフ、前掲、二〇—二一頁。

Bakhrushin, S.V.: Ostyatskie i vogurskie knyazhestva v XVI—XVII vv. (Nauchnye trudy. III, chast 2. Moskva, 1955) str. 86—87.

ウラル山脈の北端が北氷洋に没するところ、ワイガチ島との間の海峡をユゴールル海峡 (Yugorskiy Shar) というのは、ユグラにちなむ地名であるという (Berg, L.S.: op. cit. S. 51)

4 Berg, L. S.: ibid.S. 53. Bakhrushin, S.V.: op.cit. str.86 snoska 1, str. 87.

5 Bakhrushin, S.V.: ibid. str. 90,93. しかしトボラ川およびタウダ川の流域では、マンシ族がところどころで原始的な農耕と家畜の飼養とをおこなっていた。 Novoselskiy, A.A. i dr.: Ocherki istorii SSSR. XVIIv. Moskva, 1955 str. 820. Bakhrushin, S.V.: ibid. str. 98

6 Jochelson, W.: Peoples of Asiatic Russia. 1928.pp. 65—66. Novoselskiy, A.A. i dr.: op. cit. str. 821—823.

7 Bakhrushin, S.V.: Samoyedy v XVII v. (Nauchnye trudy. III, chast 2) str. 5—7.

Berg, L. S.: op. cit. S.52. Novoselskiy. A.A. i dr.: op. cit. str. 815—819.

8 Bakhrushin, S. V.: Ocherki po istorii kolonizatsii

Sibiri. (Nauchnye trudy. III) str. 143.

Howorth, H. H.: History of the mongols. Part 2. London, 1880 (repr.1938), p. 1061 ff., p. 982 ff., p. 1020.

Encyclopaedia of Islam. vol. 2, "Kucum Khan".

バルトリド著、東洋研究、昭和一四年、三五三頁。

9 シベリア王国の支配者クチュウム汗の首都を、ロシア人は「シビーリ Sibir」とよんでいた(今日でもシベリアのことをロシア語ではシビーリという)。現在タタール族は、これをイスケルと称している。カシュルイクというのは、一七世紀末にシベリアの歴史「レミョゾフスカヤ年代記」をかいたレミョゾフ (S. Remezov) がこの首都にあたえた名前である (Bakhrushin, S.V. : op. cit. str. 144, snoska 23)

クチュウム汗の時代に、シベリアのタタール族のあいだに回教がとりいれられた (Howorth, H.H.: op. cit. p. 983 Pankratova, A.M.: Istoriya SSSR. chast 1. Moskva, 1953. str. 151)

10 Bakhrushin, S. V.: Sibirskie sluzhilye tatary v XVII v. (Nauchnye trudy. III, chast 2) str.153—154.

Novoselskiy, A.A. i dr. : op. cit. str. 824—826.

11 Jochelson, W.: op. cit. p.29. Novoselskiy, A.A. i dr.: op. cit. str. 826—827.

12 Kiselev, S.V.: Drevnyaya istoriya yuzhnoy Sibiri. Glava 9.— Yeniseiskie kyrgyzy (Khakasy). Moskva, 1951.

佐口透、キルギズ民族学序説（民族学研究、新二巻一号、昭和一九年）

13 キルギス・ステップという地名は、数世紀にわたつて混乱している。本稿でのべている一七世紀ごろまでのキルギス・ステップは、明らかにイェニセイ川上流方面である。しかるに一八世紀になると、西シベリアの南方に展開するカザフスタン（現在のカザフ共和国）のステップをキルギス・ステップとよぶようになつた。その原因は、一八世紀初頭にキルギス族の中央アジア方面への大移動があり、そのごロシア人がシベリア南方のカザフスタン草原のカザック族（Kazak）をこのキルギス族と混同して、キルギス・カザック（Kirghiz-Kazak, Kirghiz-Kaisak, カイサックはカザックのなまり言葉）などとよぶようになつたためである。そのご最近まで約二世紀のあいだこの間違いのまま使用され、キルギス・ステップはわれわれの耳にも親しい地名となつていたが、近年のソ連の地理書では、カザフスタンのステップをキルギス・ステップとはよばない。これはわがくにの教科書や地図でもやめた方がよいと思う。イェニセイ川上流地方から移動していつた本来のキルギス族（ロシア人はこれをカラ・キルギス Kara Kirghiz とよんだ）は今日、ソ連中央アジアにキルギス共和国を建てている。

カザフスタンのステップをキルギス・ステップとよぶようになつた時期を考える資料として、一七一一年から二二年までトボリスクに抑留されていたストラーレンベルクのユーラシア大陸図（原著一七三〇年）をみると、シベリアの南方はイシム・ステップ（Step Yschimska）としてあり、キルギス族（Koergese, Brutt Tattari）はシル川上流のフェルガナ方面に記入されて、キルギス・ステップというものはない。しかるに、一七三四年にシベリア調査のためトボリスクを発してシベリア南部を通過した植物学者グメリンは、その著書フロラ・シビリカの緒言（一七四七年）のなかで、「イシム川の東方および南方の平原は、そこに遊牧しているキルギズ・コザックにちなんで、コザック・ステップまたはキルギズ・ステップ（die kosakischen oder kirgisischen Steppen）という」と説明している。ここにコザックといつているのは、いわゆるロシアのコサック（Cossacks）のことではなく、前述のカザック族のことである。カザフスタンのステップは、あるいはこのころからキルギス・ステップとよばれるようになつたのであろうか。

Encyclopaedia of Islam. vol. 2. "Kirgiz".

Johann Georg Gmelin 1709-1755. Ein Gedenkbuch. München, 1911.——Vorwort zur Flora Sibirica. S. 35.

Strahlenberg, P. J. von: An historico-geographical description of the north and eastern parts of Europe and Asia. London, 1738.

Novoselskiy, A. A. i dr.: op. cit. str. 831.

佐口透、カザフと清帝国との絹馬貿易（ユーラシア学会編、遊牧民族の社会と文化、昭和二七年、所収）一一頁、註二。

14 Bakhrushin, S. V.: Yeniseyskie kirgizy v XVII v.

(Nauchnye trudy. Ⅲ, chast 2) str. 180-182.
Kiselev, S. V.: op. cit. str. 570.

15 Bakhrushin, S. V.: Yasak v Sibiri v XVⅢ v. (Nauchnye trudy. Ⅲ, chast 2) str. 49 i sl.

16 パトカノフ (S. Patkanoff)、平岡雅英訳、シベリア民族人口の自然的変動（一―四）、（蒙古、九巻、二―六号、昭和一七年）　満鉄編、亜細亜露西亜の住民、昭和三年。沼田市郎編、アジヤロシヤ民族誌、昭和二〇年。　ミハイロフスキー著、高橋勝之訳、シベリヤ・蒙古及び欧露の異民族間に於けるシヤーマン教（東亜論叢、三輯、昭和一五年）

三、ウラル越え交通路の変遷

前述のような諸民族の占拠していた西シベリアにたいして、ロシア人はまず北部ウラルをこえる交通路をとつて進出し、西シベリア北部の森林帯にいたユグラ族やツンドラ帯にいたサモヤジ族と接触するようになつたが、のちには、もつと南方でウラル山脈を越える交通路をとつて、西シベリア南部の森林ステップ帯にいたタタール族を征服した。そうしてロシアのシベリア植民がすすみ、ロシア人の西シベリア開拓が森林帯から南方のステップ帯へ向つて前進するにともなつて、また欧露の経済的重心が南下するにつれて、ロシアとシベリアとをむすぶウラル越え交通路はしだいに南方へ移動していつたのである。以下それについて要点をのべてみよう。

ペチョラ川交通路（カアメニ越え）。ロシア人がはじめてシベリアを知つたのは、シベリアの北部からであつた。その理由は、後にさかんに利用されるようになつた比較的南方のカマ川交通路によるウラル山脈横断路は、古くからヴォルガ沿岸地方を占拠していたブルガル族によつて、また後にはカザニ（Kazan）のタタール族によつて、ロシア人には利用をさまたげられていたからである。

シベリア（Sibir）という地名が、ロシアの文献にはじめて現れたのは一四〇七年のことであるが、[註1] 毛皮を求めて東進したノヴゴロド人は、前述のようにすでに一一世紀には北部ウラル山脈西側のペチョラ川交通路の支配者となつており、

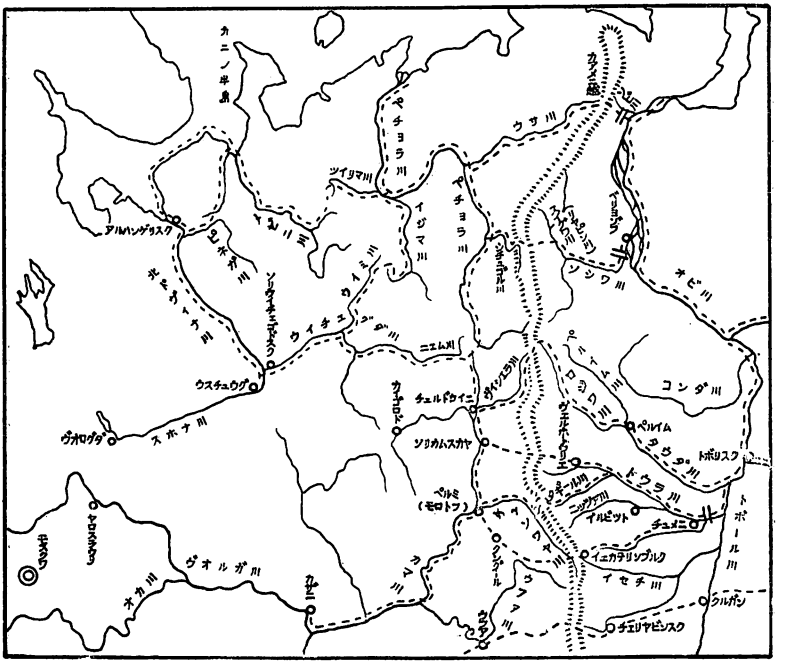
一二世紀の初期にはさらに東進してウラル山脈をこえた。当時ペチョラ川流域やユグラの土地は、毛皮獣が豊富な地方としてノヴゴロド人が特に注目したところであつた。一三世紀になると、ユグラが名目上はノヴゴロドの小郡（volost）として併合されたことが公文書にみえ、[註2] 一四世紀半ばにユグラへ交易にでかけたノヴゴロドの商人たちは、ユゴルシチナ（Yugorshchna）という特別の組合を組織したという。[註3] このようにしてロシア人のオビ川下流方面への進出は、比較的ふるい時代からウラル山脈の北部を越えておこなわれていたのである。一五世紀後半、ノヴゴロドの没落（一四七八年）とともにこの交通路は全部モスクワの手に帰した。

ノヴゴロド人が古くからウラル以東へ進出するために利用したこのペチョラ川交通路は、一七世紀に「カアメニ越えchrezkamennyy」交通路とよばれたものと大体において一致する道であつた。ウラル山脈のことを、一七世紀のロシア人は「カアメニ Kamen」とよんでいたのである。一七世紀においてこの交通路は、北ドヴィナ川の支流スホナ川畔のウスチュウグ（Ustyug）の町から、ウイチェグダ川およびその支流ウィミ川をのぼつて連水陸路をこえ、ウフタ川およびイジマ川を下つてペチョラ川との合流点に達し、ここからペチョラ川を上流へさかのぼるのであつた。（第二図参照）。そうして、ペチョラ川と支流ウサ川との合流するところで、道は二つに分かれていた。北方の道はウサ川をさかのぼり、ウラル山脈を横断する「カアメヌイ連水陸路 Kamennyy volok」（北緯六七度）をこえて、オビ川の支流ソビ川の上流へうつり、これを下つてオビ川へでる。他の一方は、もうすこし南方でウラル山脈を横断する道で、ペチョラ川からその支流シチュゴル川（あるいはシュゴール川）をさかのぼつてウラル山脈（北緯六四度）をこえ、スイグワ川およびソシワ川を下つてオビ川流域に達するものである。[註4]

また北ドヴィナ川の川口からは、陸路または海路によつてメゼニ川（Mezen）の川口にいたり、メゼニ川をさかのぼつて、ペチョラ川の支流ツイリマ川の上流へうつり、これを下つてペチョラ川にでる道もあつた。欧露の北氷洋沿岸地方と

「カアメニ越え」の大道とをむすぶこのメゼニ川交通路は、バフルーシンによれば極めて重要な経済的意義をもつていたのである。[註5]

北部ロシアから右のいずれの道をとつてペチョラ川に達するにしても、このペチョラ川による「カアメニ越え」交通路は、ロシア人の初期のシベリア進出路となつて以来重要な意義をもち、一六一九年には、トボリスクにいたる通常の道（後述のヴェルホトゥリエ経由の道）とならんで公認された。ロシアからシベリアへゆくときは、かさだかい商品をはこぶので比較的容易なヴェルホトゥリエ経由の道が利用され、ロシアへ帰るとき運搬する毛皮類は小さく荷造りができるので、かなり困難な場所のあるカアメニ越えのペチョラ川交通路は、主としてシベリアからの帰路に利用され、一七世紀をつうじて年々かなり大量の交通がおこなわれた。しかし一七〇四年になると、シベリアへの交通はすべてヴェルホトゥリエ経由の道によるようにというロシア政府の命令が発せら


カニノ半島
ペチョラ川
ツイジマ川
イジマ川
ウサ川
カアメニ越え
ヴェルホトゥリエ
ソシヴァ川
ペルム
ペルミ
（モロトフ）
ヴェルホトゥリエ
ニヤ川
ウラル川
コンダ川
ペルイム
トボリスク
トボール川
チュメニ
イルビット
ニニカテリンブルク
イセチ川
チェリヤビンスク
シルガン
ウファ川
カマ川
ヴォルガ川
カザン
モスクワ
オカ川
ヴォログダ
スホナ川
ウスチュウグ
ソリヴィチェゴドスク
ウイチェグダ川
ウイミ川
ニェム川
ヴェルホヤンスク
ヤクーツク
ヤナ川
ヴィルヨイ川
ヴィチム川
ヴィチム
ヴィチム川
ヴィチム川
ヴィチム川

れ、一七〇六年にも一七二二年にも重ねて「カアメニ越え」禁止の命令がでて、それ以後この交通路はしだいに荒廃してその重要性を失つていつたのである。[註6]

北氷洋航路。北部ウラル越え交通路に関連して、ここに海路のことを附言しておきたい。ロシアの北部からシベリアへ往来する交通路としては、以上のべたペチョラ川交通路のほかに、それと密接な関連をもつところの、北氷洋沿岸を航する海上交通路もあつた。北ドヴィナ川、ピネガ川、メゼニ川流域など北部ロシアの住民は「コチ koch」とよばれた小舟にのつて、一六世紀の前半から北氷洋の沿岸を航してシベリアにむかい、オビ川の川口に達したり、オビ湾からタズ湾にいり、タズ川畔のマンガゼイヤ (Mangazeya) に達した。[註7] ロシア人はすでに一六世紀末には、ここからイェニセイ川畔へ進出しているのであるが、とにかくこのマンガゼイヤが一六世紀および一七世紀における海上交通路の終点であつた。

この海上交通路は、北氷洋をとおつて東アジアに到達しようとするいわゆる北東航路の探査と関連して、イギリスやオランダなど外国航海者の注目するところとなり、ことにドイツ商人がロシア国内の税関をさけて、この航路を利用して商品をシベリアへ持込もうとするような形勢が現れたために、この海上交通路は一六一六年に禁止され、さらに一六二〇年には死罪をもつて厳禁されるにいたつた。このようにして、この海上交通路は一九世紀後半まで利用されなくなつたのであつた。[註8]

カマ川交通路。前述のペチョラ川交通路と海上交通路とは主として北部ロシアの海岸地方にすんでいた人々のシベリア往来に利用されたものであるが、ロシア人のシベリア征服史において、より一層重大な意義をもつたのは、もつと南方でウラル山脈を横断するカマ川交通路であつた。ヴォルガ川の支流カマ川 (Kama) によつてヴォルガ沿岸地方とシベリアとを連絡する交通路は、この地方の住民によつてかなり古い時代から利用されていたもののようであるが、一三世紀半ばまではヴォルガ中流部のブルガル族 (Bulgar) の国によつて、またそれ以後にはカザン汗国 (Kazanskoe khanstvo)

によつて、この交通路は支配されていた。[註9] ロシア人は一五五二年にカザン汗国を征服して以来、ようやくこの交通路を完全に確保することができたのである。

さて、一五世紀および一六世紀において、カマ川流域からウラル山脈をこえてシベリアと連絡する交通路には、主要なものが二つあつた。その北方のものは、カマ川畔のチェルドゥイニ（Cherdyn）からカマ川の支流ヴィシェラ川をさかのぼつてウラル山脈をこえる道であり、他の一方はカマ川の支流チュソワヤ川（Chusovaya）をさかのぼつて、もつと南方でウラル山脈をこえるものである。そのうちで、ロシア人のシベリア征服史に有名な一五八〇年代のイェルマク（Yermak）の遠征やストロガノフ家（Stroganov）に関係がふかいのは、チュソワヤ川による交通路であつた。タタール族がシベリア南部に建設していたシベリア汗国にたいするイェルマクの遠征路となつたこの交通路は、カマ川畔からチュソワヤ川をさかのぼり、「タギルスキイ連水陸路 Tagilskiy volok」（北緯五八度）でウラル山脈をこえてタギール川へうつり、さらにトゥラ川を下つてトボール川へでるのであつた。しかし、この道はまもなく廃棄され、一七世紀には道がすこし南方へ変つて、チュソワヤ川をさかのぼつてウラルをこえたのち、レジ川の上流をへてネイワ川にうつり、そこからニッツア川を下つて、トゥラ川畔のチュメニ（Chumen）に達していた。[註10]

チュソワヤ川交通路は一七世紀中をつうじてシベリアへの道として利用されたが、その沿道はチュソワヤ川流域一帯の開拓者ストロガノフ家が特権をもつ土地であつた。ことに、この時代にロシアの毛皮取引の中心地であつた北露の北ドヴィナ川方面のウスチュウグやソリ・ウイチェゴドスク（Solvychegodsk）の町から遠くはなれていたのと、またロシアの毛皮貿易の主要な相手であつた西ヨーロッパ諸国との全商業関係の中心地であつたアルハンゲリスク港（Arkhangelsk）[註11]との直接連絡をかいていたために、モスクワ政府はシベリアとの交通路として、つぎにのべるような、もうすこし北方でウラル山脈を横断する交通路をとらざるを得なかつたのである。

すなはち一五世紀および一六世紀において、カマ川畔からウラル山脈をこえてシベリアへゆく交通路として最もひろく知られていたのは、チェルドゥイニから、カマ川の支流ヴィシェラ川(Vishera)をさかのぼり、ウラル山脈（北緯六一・五度）をこえてロジワ川にうつり、ロジワ川およびタウダ川を下つてトボール川にでる道であつた。一六世紀の末にモスクワ政府はシベリア汗国を征服したのち、このチェルドゥイニ交通路の確保につとめ、この交通路はモスクワとシベリアとを連絡する初期の公道となつていた。[註12]

しかし一五九七年にバビノフ（A. Babinov）によつて、カマ川畔のソリ・カムスカヤ（Sol Kamskaya, Solikamsk）から直線的にウラル山脈（北緯五九度）をこえてトゥラ川の上流へでるもつと近い新道が発見されると、翌一五九八年にはトゥラ川の上流にヴェルホトゥリエ（Verkhoture）が建設せられ、このヴェルホトゥリエ交通路が、前述のチェルドゥイニからロジワ川畔へでる交通路にかわる公道とされ、そのご一七六三年までシベリアへ往来する公道となつたのである。[註13]（本稿七一頁参照）。

一六世紀および一七世紀においては毛皮取引の中心ばかりでなくロシア経済全体の重心が、まだ比較的ロシアの北部にあつた。そのことはウラルに達する交通路にもよく反映している。すなはちモスクワからカマ川畔のソリ・カムスカヤまでの交通路は、モスクワから北東にむかいペレヤスラウリ(Pereyaslavl)、ロストフ（Rostov）、ヤロスラウリ(Yaroslavl)ヴォログダ（Vologda）にいで、それからスホナ川を航してウスチュウグをへ、ウイチェグダ川を航してソリ・ウイチェゴドスカヤ（Sol Vychegodskaya, Solvychegodsk）にいたり、そこからカイゴロドク（Kaigorodok, Kaigorod）をへて、ソリ・カムスカヤの町に達するのであつた。このように北方をまわるのが当時の通常のコースであつて、モスクワからオカ川およびヴォルガ川を下り、カザニをへてソリ・カムスカヤに到着するのは例外の場合であつたようである。[註14]

ロシアからシベリアへはいる関門はヴェルホトゥリエで、ここには税関があり、カマ川交通路をとつてシベリアへ旅行する者は、すくなくとも原則的には、すべてここを通過せねばならぬこととなつていた。すでにのべたように北方の「カアメニ越え」によるペチョラ川交通路も公道となつており、主としてシベリアからの帰路に利用されていたが（本稿六六頁参照）、一七世紀後半になつて西シベリア北部海岸のマンガゼイヤの産業が衰微すると、商人たちはロシアへの帰路にもヴェルホトゥリエを経由するようになつた。ロシア政府は国庫収入を考慮して、ウラル以東への交通がすべてヴェルホトゥリエを通過するように努力し、ここを通らない新道がひらかれることを極力阻止したのであつた。[註15]

クングール交通路。ロシア政府は前述のように、ヴェルホトゥリエ公道以外の交通路によるシベリア往来をできるだけ禁止しようとしたが、しかし、もつと南方にはウファ（Ufa 一五八六年建設）をとおる古くからの商業路があり、また一七世紀の後半には、クングール（Kungur, 一六四九年建設）経由の道が重要な意義をもつようになつてきた。この道はクングールからウファ川の支流ビセルチ川をへてチュソワヤ川の上流にいたり、そこから北東へむかう道はレジ川をへてイルビット（Irbit）方面へゆき、南東にむかう道はウラル山脈（北緯五七度）をこえてイセチ川の上流へでるもので、後代のシベリア街道は大体このコースをとつて、イェカテリンブルク（Yekaterinburg 一七二二年建設、現在のスヴェルドロフスク Sverdlovsk）に達していた。[註16]

クングール経由の交通路は、前述のヴェルホトゥリエ公道よりも南方でウラル山脈をこえる道である。一八世紀になると北ロシアの海岸地方の商業がおとろえ、モスクワを中心とする中部ロシアの商業はますます発展して、ロシア経済の重心は一六世紀および一七世紀に比較すれば南方へ移動した。[註17] そうして他の拙稿でものべたように、欧露の南方および東南方への開拓がすすみ、ヴォルガ下流方面やウラル西方のバシキリア（Bashkiria）への移住と開拓がいちじるしくなつてくる。一方ではこのようなロシア経済と人口との重心の南下があり、また一方ではシベリアの開拓が南方へ前進したとい

う事実があり、イェカテリンブルク附近の鉱山開発などのこともおこつて、従来のように遠くソリカムスクをまわり道しないで、カザニをへてモスクワとチュメニとを直接に連絡するクングール交通路が、北方のヴェルホトゥリエ公道にかわる運命をもつこととなつた。[註18]

ロシア政府は一八世紀になつてからも、ヴェルホトゥリエ公道へすべての交通を（とくに商人の交通を）ふりむけようとして、たびたびクングール交通路にたいする禁止令を発したが、結局、一七六三年にクングール、イェカテリンブルク、チュメニをむすぶ街道の自由交通が公認されることとなり、北方のヴェルホトゥリエの関所は、その年のうちに廃止されてしまつた。このクングール街道は全一九世紀をつうじてロシア本国からシベリアにいたる唯一の交通路となり、そうしてまたシベリア最初の鉄道も大体この交通路にしたがつて、一八八五年にペルミ（Perm 現在のモロトフ）からイェカテリンブルク（現在のスヴェルドロフスク）をへて、チュメニまで建設されたのである。[註19]

シベリア横断鉄道。しかしこれとほぼ同じころにシベリア横断鉄道の建設計画が具体化すると、それはもつと南方でウラル山脈を横断するものとなつて現れた。すなはちヴォルガ川畔のサマラ（現在のクイブイシェフ Kuybyshev）からウファを経由して建設された鉄道は、一八九〇年にウラル山脈に達し（北緯五五度）、やがてこれを越えてチェリヤビンスク（Chelyabinsk）まで延長された。ロシアのシベリア開拓を飛躍的に推進させる要因となつたシベリア横断鉄道の建設は、このチェリヤビンスクを西部起点として一八九二年から開始されたのである。[註20] かくて、欧露とシベリアとをむすぶロシア人のウラル越え交通路は、ふるく北極圏内にはじまり、一九世紀末にいたつて北緯五五度まで南下したのである。

註1　シチェグロフ原著、シベリヤ年代史、一三頁。
Lebedev, D. M.: Ocherki po istorii geografii v Rossii XV i XVI vekov. Moskva, 1956. str. 28.

2　シチェグロフ、前掲、一二頁。

3　Bakhrushin, S. V.: Ocherki po istorii kolonizatsii Sibiri v XVI i XVII vv. (Nauchnye trudy. III. Moskva, 1955) str. 75.
Bakhrushin, S. V.: ibid. str. 138.

4 Bakhrushin, S. V.: ibid. str. 72—73.

一四九九—一五〇〇年、モスクワの諸侯セミヨン・クルブスキイ（S. F. Kurbskiy）等のひきいるユグラ遠征軍が、ペチョラ川畔からどの道をとつてウラル山脈をこえたかは確定できない。本文に記述した二つの道のうち、バフルーシンは南方のソシワ川へでる道と推定しており（Bakhrushin, op. cit. str. 73, snoska 2）、レーベジェフは北方のウサ川からソビ川へでる道のほうを妥当と考えている（Lebedev, op. cit. str. 34—35）

5 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 72—73.

ヘルベルシュタインは、その著書のなかに一六世紀初期のロシアの「道路案内書」を飜訳しているが、かれは「モスクワからオビ川畔へゆく人は、ウスチュウグおよびドヴィナ川をへてペルム地方（三上註、ウイチェグダ川流域）を通るもつとしばしば利用される近道をとるであろうが」と記したのち、「道路案内書」にしたがつて、メゼニ川からペチョラ川をへて、前述のシチュゴル川からウラル山脈をこえソシワ川へ下る道を記述している。Herberstein, Sigismund von: Notes upon Russia. (first ed. 1549). London, 1851—52, vol. Ⅱ, pp. 37—39.

6 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 82, 86—87.

7 マンガゼイヤというのは、オビ湾東部の沿岸地方のことである（Ibid. str. 141, snoska 15）

マンガゼイヤという地名は、エネツ族の一部族名であるモンカジMongkasi に由来すること。現在はイェニセイ川の右岸にしかいないエネツ族が、以前にはその左岸地方にもいたものであること。ロシア人はすでに一六世紀半ばごろには、西シベリアの極北部のオビ川とイェニセイ川との間の地方をよく知つていたことなどの考証はベルクにみえる（Berg, L. S.: op. cit. S. 53—57）

この地方にはタズ川畔にマンガゼイヤ市が、一六〇〇年の末か、あるいは一六〇一年のはじめごろに建設された。（Lebedev, D. M.: op. cit. str. 40, snoska 1）

8 Bakhrushin, S. V.: op. cit. 87—93.　この時代の北氷洋沿岸の海上交通路については、レーベジェフにも地図をいれた詳細な記述がある（Lebedev: op. cit. str. 99—111）。北氷洋によるイギリスの初期の対ロシア貿易、および北氷洋開拓史については左記参照。

Willan, T. S.: The early history of the Russia Company 1553—1603. Manchester, 1956.

Taracouzio, T. A.: Soviets in the arctic. New York, 1938.

9 ブルガル族による一〇世紀ごろの毛皮貿易については、ヤクボフスキー、グレコフ共著、播磨稲吉訳、金帳汗国史、昭和一七年、七—八頁、九〇頁、一三二頁参照。　ブルガル族は、シベリアの諸民族から毛皮を入手していたが、それらの民族をばロシア人がよんだのと同様にユグラ族（ユラ Yura）とよんでいた（Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 93）

10 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 95, 104.

11 Fisher, R. H.: The Russian fur trade 1550—1700. Berkeley, 1943. pp. 164—165, 184—185.

12 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 94.

バフルーシンは、モスクワ大公の軍司令官フィョードル・クルブスキイ（Fedor Kurbskiy）等が、一四八三年ウラル東方のタウダ川流域に住んでいたペルイム（Perym）のマンシ族（ヴォグル族）にむかつて遠征したとき、すでにこの道を利用したと考えているが、レーベジェフの見解では、もつと北方の道をとつたとし、ウイチェグダ川の上流からペチョラ川の上流へとさかのぼつてウラル山脈をこえ、ペルイム川の上流からタウダ川へ下つてゆく道を図示している(Lebedev, D. M.: op. cit. str. 31, fig. 2)

13 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 105.
Lebedev, D. M.: op. cit. str. 68.

14 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 106.

ロシアからシベリアへゆく道路と水路とを記述した一七世紀初めごろのコサックの記録を、飜訳しているマッサによれば、ソリウイチェグダからヤレンスク、ニエム川をへて、カマ川上流のヴィシェラ川へうつり、ソリカムスクからウラル山脈をこえて、ヴェルホトゥリエ、チェメニを経由しトボリスクに達する道が詳細に記述されている（バッドレイの英訳とその註による）。Isaac Massa's Kort Verhael, or "Short Account" of the roads and waterways from Muscovy to Siberia. Amsterdam, 1612. (in J. F. Baddeley: Russia, Mongolia, China. London, 1919. vol. 2. pp. 1—5)

一七世紀のロシアの遣支使節は北方の道をとつている。一六七五年の使節スパファリ（N. Spafariy）は大体この道をいつたようであるし、またカーアンはロシアの遣支使節イスブランツ（Isbrants Ides）の旅行を記述するにあたつて、使節一行は一六九二年モスクワを出発し、「普通の水路によつた」と本文に記し、カイゴロドクをへてソリカムスクに到着したことを註記している（Cahen, G.: Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand (1689—1730). Paris, 1912 (repr. 1941). p. 84, note 3)

しかるに、一八世紀の遣支使節イズマイロフ（L. V. Izmailov）は一七一九年に、モスクワからカザニ経由の道をとつてシベリアへはいつている(Cahen, G.: Ibid. p. 160)

15 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 106—109.

フィッシャー(J. E. Fischer シベリア史—一七五七年—の著者）によれば、一六五六年にチュソワヤ川による比較的よい道が発見されたが、ヴェルホトゥリエをとおる商品がそちらへそれないように、一六五九年には通行禁止になつたということである（Cahen, G.: op. cit. p. 57, note 3)

16 Bakhrushin, S. V.: op. cit. str. 109—110.

17 飯田貫一、ロシヤ経済史、昭和二八年、一四三頁。
Lyashchenko, P. I.: History of the national economy of Russia. New York, 1949. maps no. 5—7. これは原著モスクワ一九三九年版の英訳であるが、そのご刊行された原著の増訂版では、地図が全部はぶかれている。

18 康熙帝の命令でヴォルガ下流域のトルゴート族に使した図理琛（Tu-li-shin）は、康熙五二年（一七一三年）、シベリアからヴェルホトゥリエ公道をとつてウラル山脈をこえている（図理琛、異域録、朔方備乗、巻四三—四四所収）。Staunton, G. T. tr.: Narrative of the Chinese embassy to the Khan of the Tourgouth Tartars. 1821 (repr. 1939). pp. 112—117.

また、ベーリング大探検隊のシベリア調査班であつたグメリンやミュレル（G.F. Müller）等の一行は、一七三三年にカザニからクングールを経由してウラル山脈をこえ、イェカテリンブルク、イルビットをへて、チュメニに達している（Gmelin, J. G.: Reise durch Sibirien. Göttingen, 1751. Bd. I. S. 3, Tage=Register, Karte）

19 Bakhrushin, S.V.: op. cit. str.111.

榎本武揚は明治一一年（一八七八年）に、また福島中佐は明治二五年（一八九二年）に、このクングール交通路をとつて欧露からウラル山脈をこえ、シベリアへはいつている。榎本武揚、シベリア日記、昭和一四年、二七—四九頁。　福島安正、単騎遠征（福島将軍遺績、昭和一六年、所収）四六—五六頁。

20 満鉄編、亜細亜露西亜の交通、昭和二年、六三—七二頁。

四、結　言

以上は主としてシチェグロフ、バフルーシン、ベルク、レーベジェフ等、ソ連における西シベリアの歴史学的ならびに歴史地理学的研究の成果を参照しつつまとめたものである。前半においては、ロシア人進出時代の西シベリア北部にはユグラ族やサモヤジ族、南部にはチュルク系のシベリア汗国のタタール族やアルタイ山地のタタール族、またイェニセイ川上流方面にはキルギス族がいたことなどをのべ、後半ではウラル越え交通路の変遷を考察した。ロシア人は最初ウラル山脈の北部をこえて、シベリア北部のツンドラ帯や森林帯の諸民族と接触するようになつたが、のちには南部の森林ステップ帯の諸民族をも征服するにいたり、欧露の経済的および人口的重心の南下ともあいまつて、ロシアとシベリアとをむすぶウラル横断交通路は、時代とともに北極圏内からしだいに南方へ、北緯五五度のシベリア鉄道まで移動したのであつた。つぎの機会にはこれと関連して、シベリア北部の森林帯から南部の森林ステップ帯へ前進するロシア人の開拓につい

て、歴史地理学的な考察を試みるつもりである。

附記　本稿をかくにあたつて参照した地図類は左記のものである。西シベリアの諸民族については(1)(2)(3)を、ウラル越え交通路については(4)(5)(6)(7)を使用した。また帝政時代の地名でソ連となつてから変更されたものも多い。その対比には(8)が便利である。これは欧露の部であるが、ウラル以東もオビ川までをふくみ、一三六三町村の新旧地名対照表とその位置をしめす地図がある。(9)(10)は校正中に着いたが、これにも古代および一五世紀末から一七世紀初期までの西シベリアの民族について、参照すべき記述がある。

(1) Karta Sibiri pervoy polov. XVII v. (Miller, G. F. : Istoriya Sibiri. II. Moskva, 1941.)

(2) Karta rasseleniya narodov Sibiri v kontse XVIII v. (Bakhrushin, S. V. : Nauchnye trudy. III, chast 2. Moskva, 1955)

(3) Narody SSSR. (Geograficheskiy atlas SSSR. Moskva, 1954)

(4) Strahlenberg, P. J. von : An historico-geographical description. London, 1738. map.

(5) Pallas, M. P. S. : Voyages de M. P. S. Pallas. Planches. Paris, 1793.

(6) Atlas istorii SSSR. Moskva, 1955.

(7) Atlas SSSR. Moskva, 1955.

(8) Meckelein, W. : Ortsumbenennungen und -Neugründungen im europäischen Tiel der Sowjetunion. Berlin, 1955.

(9) Tretyakova, P. N. i dr. : Ocherki istorii SSSR. Pervobytno-obshchinnyy stroy i drevneishie gosudarstva na territorii SSSR. Moskva, 1956.

(10) Nasonova, A. N. i dr. : Ocherki istorii SSSR. Period feodalizma konets XV v. —nachalo XVII v. Moskva, 1955.

（昭和三一年一二月稿）

The Natives of Western Siberia and the Routes across the Urals

By M. Mikami

When the Russians expanded into West Siberia in the 16th and

17th centuries, they found settled in the northern part the "Yugra" (Voguls or Mansi, and Ostyaks or Khanty), the "Ostyak-Samoyed" (Serkupy), the "Yenisei Ostyak" (Kety), and the "Samoyad" (Nenets), as the Russians called them, and in its southern part, the Tatars of the Siberian khanate and the Tatars of Altai Mountains, and in the upper valley of the Yenisei, what they called the Yenisei-Kirgiz. (Fig. 1)

The Russians first came to the northern part. In the beginning of the 12th century, they crossed the northern part of the Urals, and came to be in contact with the various peoples in the tundra zone and the forest zone of the northern part of West Siberia. Later they conquered the peoples in the southern part. The routes across the Urals, that connected European Russia and Siberia which first passed inside the southern edge of the Arctic region (lat. 67°N), came to move down south to the Trans-Siberian Railroad (lat. 55°N). (Fig. 2)